



magus



ソウブンドウ

一際強く腰を打ち付けると、女は甲高い悲鳴を上げ、弓なりに背を反らせた。

僕を締め上げていた筋肉の強張りは小刻みな痙攣を経て、やがて、緩やかにほどかれていく。せわしく上下する胸を撫でてやりながら、薄く開かれた瞳を覗き込むと、恍惚の色を湛えた水面には、確かに、僕の顔が映り込んでいた。悦楽に浸りながら、この女は僕を視ている。そう意識して、僕は精を吐き出した。

「そろそろ行かなくちゃ」

身体の火照りが冷めるや、僕は女から身を引き離れた。彼女に背を向けて立ち、床に脱ぎ散らかしてあったチュニックを拾い上げる。緩慢な動作で、わざと時間をかけてそれを着る。わざわざ振り返るまでもなく、背中や臀から足の先まで、彼女の視線を感じられた。

女の家を出ると、石造りの町並みを西日が赤く染めていた。家々の屋根も歩道の石畳も、それらを区切るも石壁も一様に赤く、燃え盛る炎に炙られているかのようだ。そんな景色の中、ただひとつ黒々とした輪郭を保っているのは、厳然と聳えるウェスウィウスの山影ばかり。

十七年前の、やはり夕暮れ方、血と汚泥にまみれて僕はこの町に生まれた。

それはちょうど、ネアポリスにまで被害を及ぼしたあの大地震のただ中のことで、母は己が産み落としたばかりの僕を庇い、崩れ落ちた壁に背をへし折られて死んだ。勿論、僕にその記憶はないけれど、後になって産婆から聞かされた話によれば、母は血のあぶくを吐きながらも慈愛に満ちた瞳で僕を見つめていたという。けれども、恐らくそれは見間違いだ。

母はきっと、はらわたが押し潰されるているのも忘れて見惚れていたのだ。

この僕に。

僕の成長の歴史は、この町の復興の歴史に寄り添っている。

女の家を後にした僕は町を目抜き通りを抜け、まだ人出の多い市場に足を踏み入れた。頬の赤い女の子が僕を目で追う。酒屋の親父が葡萄酒の杯を傾けながら僕を眺める。人妻らしき女が擦れ違いざまに流し目を送ってくる。果物屋のかみさんが林檎を放って寄越しながら片目をしばたたく。

誰もが僕を、見る。観る。視る。

何故なら僕は美しいから。

ウェヌスに祝福されたこの町では「美」こそが何より尊い徳なのだから。毒にならない程度の皮肉といじらしい気恥ずかしさを込めて、僕のことを「ナルキッソスのようだ」と云う奴もいる。けれども、それは間違いだ。僕は神殿の巫女にも、裏通りのごろつきにも、分け隔てなく、そして、惜しみなく、愛を注いでやる。僕が抱き、抱かれれば、女達は山賤のように吼え猛り、男達は処女のように喜悦の涙を流す。

市場から裏通りに入ると、血と精液の混じった匂いが鼻を衝いた。気の早い娼婦達がぼつりぼつりと石壁に凭れ掛かっている。立ち並ぶ娼婦は通りの奥へと進むほど人気のある者になってゆき、どん詰まりでは町の外から来た客向けの娼館が身を横たえている。

僕は娼婦達の視線を身にまつわりつかせながらそこに向かう。

娼館の軒をくぐるなり僕の姿を見つけた支配人が寄ってきて、もう客が来ると耳打ちした。見れば、上等な酒場風に設えられた待合室の片隅で、一人の男が杯を傾けている。

奇妙な風体の男だった。黒い衣に身を包んでいたが、それは僕らが見慣れているようなチュニックとは違い、腰のところで上下に分かれていた。直線的でしわやたるみの全くないそれは、僕の目にはいかにも窮屈そうに映った。その衣とは対照的に、手や顔はいやに白い。北の地からはるばるやって来た異民族なのだろうと僕は見当をつけた。

僕は給仕から葡萄酒の杯を受け取り、男の隣に立った。「やあ、お待たせ」

男は振り返り、僕の顔をまじまじと眺めた。顔中を視線に舐め回されているようで、心地好い。男はしばらくそうしてから、「君ニ逢エル日ヲ、ズット待ッテイタ」

ひどい訛りだった。

*

「ソコニ立ッタママ、服ヲ脱イデ」男は部屋に入るなり寝台に腰を下ろし、後ろ手で扉を閉めていた僕に、そう指図した。

まったく、せっかちな奴だ。僕を買うってことは、僕の身体を買うってことと同義じゃない。チュニックを滑らせて肌を晒すところから、後朝の別れまで、僕の恋人という座を買うってことだ。正直、僅かばかり興が削がれた。

しかし、男は情欲にせつつかれていたわけではなかった。云われた通り全裸となった僕に、彼は「ソノ場デユックリ回ッテ」と、次の指示を出した。云われるがままに、僕は回る。ゆっくりと裸身の向きを変える。彼は食い入るように僕の身体を見た。その視線に、僕は興奮を覚える。

「画家なの？ それとも、彫刻家？」僕は尋ねた。作品のモチーフに僕を据えたいと望む芸術家は多い。実際、この娼館にも僕と娼婦とのまぐわいを描いた壁画がある。

「違ウ」男は首を振った。「君ガ私ノ探シ求メテイタ人物カ、ソレヲ確認シタカッタダケダヨ。ヤハリ、君デ間違イナイヨウダ」

「へえ、名前じゃなくて身体で確認するんだ。面白いね」僕は男の隣に腰を下ろした。

「君ニ名前ハイラナイ。顔ヲ見テ、君ダトワカッタ。身体ヲ観テ、君ダト確信シタ」

「前にどこかで会ったことが？」僕は訝った。

「君ニトッテノ過去ニオイテ会ッタコトガアルカトイウ意味ナラバ、ソレハ無イ。ケレドモ、私ハ君ヲ見タヨ。私ダケジャアナイ。本当ニ数エキレヌホド多クノ衆目ヲ君ハ集メテイル。何故ナラ君ハ美シイカラ。私モー目デ君ニ惹カレタヨ」

それはそうだろう。わざわざ遠国から僕に会いに来る者は後を絶たない。そして彼らは必ず僕に魅了される。昨日僕を抱いた海外領土総督——プリニウスとかいったかな——も、僕の髪を撫で回しながら云ってたっけ。「お前は本当に最高だ。必ずまた来るよ」って。しかし、目の前の男が云っていることには奇妙な齟齬がある。初対面だというなら、身体を観て確信したというのは一体どういうことだろう。

「君ハ類イ希ナク美シカッタ。ダガ、同程度ニ惨メデモアッタ。赤子ノヨウニ四肢ヲ縮コマラセテ。恐怖ニ顔ヲ歪マセテ。人々が君ニ注グ視線ニハ、例外ナク憐レミガ含マレテイタ」

「何を云ってるんだ」僕は男から身を離れた。僕が惨めだった？ 憐れだった？ そんな莫迦なことがあって堪るか。いつだって、僕の姿は見る者の目に、美しく、華々しく、映るはずだ。そうなるように生きてきたはずだ。「誰か、人違いをしてるんじゃないの？」

しかし、男は僕の言葉に耳を貸すことなく続けた。「私ハ、アンナ姿デハナイ、自信ニ満チ溢レタ君が見タカッタ」

「やめてくれ。さっきから何を云ってるんだ。まるでわからない」僕は混乱していた。奇妙な装束の男が、囁くようにして語る内容に。

「君ノ美シサヲ永遠ノモノニシタイトハ思フナイカイ？ 世界中ノ人々ニ、ソノ美シサヲ享受サセテヤリタイトハ？」

彼が炯々と瞳を輝かせながら口にした言葉は、僕の胸を衝いた。それは僕が常から抱いていた望みそのものだ。もし叶うならば魂を差し出したって構わないが、しかし、決して実現することのない願い。僕は立ち上がってかぶりを振り、自分自身に云い聞かせるようにして反駁した。

「やっぱり、芸術家なんだね。それとも、その後援者ってところかな。どちらにせよ、いくら僕の姿を模したものを造ったところで、所詮は紛い物に過ぎないよ。それに――」

「ソレニ？」男は興味深げに身を乗り出した。

僕は捲し立てた。「僕が皆の目に美しく映るのは、この町で僕を見るからだ。いまだそこかしこに十七年前の死をひきずるこの町で。ウェヌスを讃えるこの町で僕を見るからだ。僕の似姿が世界中に散らばったところで何の意味もない。世界中の皆が、ここに来て、ここで僕を見なくちゃ駄目なんだ」

云い終えて相手に目を遣ると、男は満足げな笑みを浮かべてこちらを眺めていた。手を打ち合わせて、「君ノ命ト引き換エニ、ソノ全テヲ叶エルコトガデキルトシタラ、君ハドウスル？」

僕はじっと男を見返した。沈黙。それが、僕の返答だった。

「私ハソノタメニ遙々ヤッテ来タンダ」

男はそれから、僕が為すべきことを事細かに語った。馬鹿げた話だ、僕に一杯喰わそうとしてるんだ。頭の片一方ではそう思いながらも、呪文でも唱えるかのような彼の言葉に、僕は緩やかに絡め取られていた。

「ねえ、僕を抱きたいの？ それとも、抱かれないの？」

この男は魔術師だ。不意にそんな考えが浮かんだ。恐ろしくなって、僕は相手の言葉を遮るようにして抱きついた。黙れ。黙ってくれ。そう心中で叫びながら、縋りつくように。

けれども、男は淀みなく語り続けた。そうして全てを語り終えると静かに立ち上がり、呆然と眺める僕を尻目に、部屋から出て行った。去り際にこちらを一瞥し、「後ハ君次第ダ」という言葉を残して。

独り取り残された僕は給仕を呼びつけ、ぶどう酒を持ってこさせた。男の言葉を頭から拭い去ろうと次から次に杯を乾したけれど、とうとう朝になってもバックスは僕の元を訪ねてはこなかった。飲むほどに冴え返る頭の中で、男はいつまでも囁き続けた。

*

ウェスウィウスの吐き出した噴煙が黒々と空を覆い、昼日中だというのに町は闇に包まれている。黒煙からは白い石礫が雨のように降り注ぎ、家々の屋根や石畳を打つ。その音が重い地鳴りと響きあい、終末にふさわしい音楽を奏でている。

あの晩に男が云っていた通りの光景だ。

かの魔術師は、手首に巻いた不可思議な腕輪——数字の刻まれた円状の飾りが付いていて、どういう仕掛けなのか、その中心では大小いくつかの針が動いていた——を眺めながら、町を襲う災禍を克明に言い当てた。

あるいは天を仰いで言葉を失い、またあるいは地に伏して泣き叫ぶ人々の合間を縫って、僕は広場へ駆けた。この町で僕に次いで美しい娼婦の手を引きながら。

男は云っていた。何が起きても恐れるな、と。そして、君自身が最も美しく光り輝く姿を人々の前に示せ、と。そうすれば、僕の姿は、美術品のように美を解さぬ成金によって死蔵されることも、蛮族によって掠奪されることもなく、後世まで永遠に遺る。僕が愛し、僕を愛するこの町とともに。

広場へと辿り着いた僕は、女を抱き寄せ、纏っている衣を剥ぎ取った。彼女は僅かばかりも抵抗しなかった。むしろ、迫り来る破滅の中で僕に選ばれたということに陶醉しているようだった。

僕も衣を脱ぐ。石礫が背を打つ。彼女の身体を愛撫する。身を貫かれる喜びに声を上げながら、彼女が僕を見る。天を仰ぎ地に伏していた人々の視線が、徐々に僕に集まってくる。

そうだ。見ろ。観ろ。視ろ。もっと僕を見ろ！

——ポンペイの町に復元されたこれら六十七体の石膏像の中でも、ひときわ有名なものといえは、やはり、俗に『死と性愛』と呼ばれる男女一对の像であろう。町の中心に位置する広場にあるこの像は、交接のさなかにある男女の最後の姿を残している。ヴェスヴィオ山から降り注ぐ火山灰とそれに続く火砕流の中、何故、二人はこのような場所で情を交わしていたのか。それはいまもって不明であり、この先も謎として残り続けるであろうが、ただ一つ確かに言えることは、この像が、わけても男性像が、比類なき美しさをもって見る者すべての胸を打つということである。

(礦文館『古代都市ポンペイの美と死』より抜粋)

